

チャランケ通信 第184号 2017年月日

「チャランケ」とは、アイヌ語で談判、論議の意、「アイヌ社会における秩序維持の方法で、集落相互間又は集落内の個人間に、古来の社会秩序に反する行為があった場合、その行為の発見者が違反者に対して行うもの、違反が確定すれば償いなどを行って失われた秩序・状態の回復を図った」(三省堂『大辞林』より)

元参議院議員 峰崎直樹

安倍内閣の支持率の低下が進む、政権の危機に直面

先週も又いろいろと大きな問題が多発し、新聞の見出しが、連日踊ったようだ。

政治の世界では、安倍内閣に対する支持率が相変わらず落ち込み続けている。毎日新聞が、今月 22~23 日にかけて実施した世論調査によれば、1 か月前に比べて 10%以上下落し 26%に落ち込んでいる。20%台にまで落ち込むと政権にとって危険水域と言われ、そこから挽回する事はほぼ不可能だとされており、安倍政権側の危機感は相当高まっているようだ。現に 23 日投開票の仙台市長選挙でも、野党側が推薦した郡和子前衆議院議員が当選し、東北の政令指定都市仙台でも自民党に逆風が吹き続けているのだ。問題の根源が、安倍総理自身にあるだけに、内閣改造をやったぐらいでは収まるとは思えないわけで、政権与党側は深刻な事態に直面しているに違いない。

安倍総理、加計学園特区申請認識時期 1月20日発言の波紋!

そうしたなか、国会での衆参予算委員会の閉会審査が 24 日衆議院、25 日は参議院で総理出席の下でテレビ中継される中で開催され、加計問題に対する疑惑の解明に注目が集まった。衆議院の質疑の中で、安倍総理は加計学園が獣医学部新設の申請を知ったのは何時か、という点について、今年の 1月20日の国際戦略特区で正式決定する直前であったと答弁した事が、問題を混迷の淵に落とし込んでしまった。この答弁は、案外命取りになる可能性を秘めているようだ。大体、加計学園の加計理事長とゴルフや食事を何度もする間柄にある安倍総理が、許認可が正式決定されるまでは申請を知らなかったこと自体が不自然であり、過去の国会の場における答弁との矛盾も当然のことながら出てくる。

舞台は参議院予算委員会に於いて、蓮舫民進党代表は安倍総理が加計学園の獣医学部新設の事実を知ったのは、参議院での社民党福島議員や民進党の平山佐知子議員の質問の中で、1月20日ではなく、既に早い段階から認識していたとする答弁議事録を掲げ、衆議院の答弁との矛盾を追及した。安倍総理は、テレビで見ていると落ち着きも無く、しどろもどろになりながら、過去の答弁に

ついて修正し、あくまでも 1 月 20 日であると強弁するに至っている。

国民の誰しもが、安倍総理がつじつまを合わせるべく、加計学園からの獣医学部新設申請を初めて認識したことを 1 月 20 日にしたことを知っているわけで、安倍総理に対する不信感は解消されるところか、ますます疑惑は深まったと見て間違いないだろう。

加計孝太郎学園理事長、国会での喚問実現は是非とも実現を

それにしても、加計学園の問題のキーパーソンである加計孝太郎理事長を呼んでの国会で真質疑が不可欠になっているにもかかわらず、どうして実現できないのであろうか。野党側は、参考人招致はもちろん証人喚問をも要求しているにもかかわらず、与党側が強硬に反対して実現していないようだ。この点に関して、元法務省の検事である郷原信郎氏は自身のブログ『郷原信郎が斬る』の 7 月 25 日付記事「危険な賭け」に出たことで『詰将棋』に陥った安倍首相のなかで、加計学園の抱えている財務状況や既に学園建築工事が進んでいる企業との関係など、調査をしていくべき問題点が満載されている。野党側はもちろん、マスコミ関係者は是非とも問題の解明に向けて全力を挙げて欲しいものだ。(郷原さんのブログ <https://nobuogohara.com/>)

内閣改造前の稲田防衛大臣辞任へ、任命責任が問われるべき

こうして、今週 8 月 3 日には、内閣改造に踏み切ろうとしているわけだが、その前に「日報隠ぺい問題」で自らの国会答弁との矛盾をはじめ、自衛隊の統治能力を厳しく問われた稲田防衛大臣が、内閣改造の 3 日を待たずに辞任に追い込まれ、これまで自民党内からも「なぜ稲田氏をあそこまで庇うのか」という批判がある中で罷免してこなかった任命責任が浮かび上がってくる。事は、防衛相はもちろん、最高指揮官たる総理自身のシビリアンコントロールに関わる問題であり、「暴力装置」を正しくコントロールできなくなっている現実を深刻に考える必要がある。色々と報道される中で、制服組と背広組の対立が深刻になっているとも言われ、陸・海・空三軍の内部矛盾すら存在しているようだ。何時でも、軍事力を背景にクーデターの危険性を秘めているわけで、今回の「日報隠ぺい問題」の背後にある自衛隊の内部に巣食っている病弊を根絶する必要がある。

まさか、蓮舫民進党代表の辞任! 次の代表は背水の陣を

もう一方の問題である、民進党の蓮舫代表の辞任問題である。都議会議員の選挙総括の中で、野田幹事長が引責辞任を表明した事や蓮舫氏自身の国籍問題

での対応など、次の執行部づくりに向けて動き始めるのではないかと、思われていた。ところが、突然の辞任記者会見に至ったわけで、何が何だか部外者には解りにくい。たまたま上京していたので、少しばかりの関係者しか話を聞くことしかできなかったのだが、やはり、この難局を統率していく自信が持てなくなったのではないかと、言うあたりだろうか。野田幹事長という後ろ盾が無くなったことにより、それに代わる適任者の選出にも自信が持てなかったのだろうか。これで、一人の有力政治家を政治的には失ったわけで、民進党にとっては後の無い状況になったと言えよう。

後任の代表選挙に向けた動きも出始めており、前原元外務大臣と枝野元官房長官の争いになるのではないかと、見られている。本当に今度の代表選挙で、民進党は何を目指す政党なのか、ガバナンス能力の回復に向けた政党としての基礎体力作りも含めて、しっかりとした体制づくりを進めて欲しい。前原氏については、井手英策慶応義塾大学教授と共に新しいビジョンづくりを進めてきただけに、その政策について広く党内外にアピールしてもらいたいものである。他方、枝野元官房長官も論客であり、弁護士として法律に関するリテラシーを持っておられ、憲法改正問題では民進党のオピニオンリーダーでもある。それだけに、安倍政権と厳しく対峙していく論客として力を発揮して欲しい。

政策も大事だが、それ以上に民進党のガバナンス改革の実現を

問題は、政策だけでなく、民進党という政党のガバナンス、組織力・情報発信力を着実に強化して欲しいと思う。広く、党内外にある安倍一強に対する不満や批判を受けられるよう、全力を挙げて欲しい。もはや、民進党にとって後がなくなっており、最後の挑戦と見て良いのだろう。

今後の民進党代表選挙の行方にも、しっかりとウオッチしていきたい。

右往左往した連合の労働基準法改正案への対応、労働者の健康や

時短・休息・余暇の確保に全力を

さて、連合の労働基準法改正問題については、結局のところ修正協議についての政労使合意には至らなくなったようだ。連合として、従来通りいわゆるホワイトカラーイグゼンプションに対して反対を貫いていく事を、札幌で開催された執行委員会で決定したとのことだ。もうこの問題に関する論評は既に前前号以来で触れたので繰り返さないが、要はホワイトカラーも含めた労働者の労働時間管理を強化し、連続休暇や休息时间などをしっかりと確保し、過労死などという由々しい問題が二度と出ないよう万全を期すことにあったわけで、今後とも労働者の健康問題についての取組を強化して欲しい所である。